

【PR】長州藩モチーフのアクセサリ&グッズショップ「小間物屋歴創」

西暦	旧暦	時間	聞多	お静	俊輔	他
1864年10月25日	元治元年9月25日		斬り刻まれる			御前会議
1864年10月26日	元治元年9月26日	夜半				周布さん自刃
	?		山口発			
	聞多出立の 1日 or 2日後					高杉は四国へ
	?		下関着		下関で待機中	
			聞多・俊輔が合流			
			なじみの料亭「林亀」へ			
			「土方の親分」に変装			
			俊輔の発案で 「土方の親分」に変装	俊輔が念のため 「親分」の「姉御」役を依頼 ※お静は下関での聞多の馴染の芸妓		
1865年3月上～中旬	聞多別府着の 2日前		下関発		林亀夫婦・仲居と共に 船乗場で聞多を見送る	
			船で別府へ			
1865年3月中旬	慶應元年2月中旬	夕方	別府着			
			「春山花輔」と変名	聞多が武士言葉連発 フォローに四苦八苦		
			船頭の紹介で港に近い流川通りの 旅館「若彦」(若松屋旅館)へ 二階の客室に通される			
			潜伏生活スタート			
	その後	昼	寝る			
		毎晩 9 or 10時ごろ	楠温泉(共同温泉)	お風呂は内湯		
			潜伏中なのに早速目立つ			
			人目を避けて 1人で温泉に行くから 宿の主「彦七」に 怪しまれる	若彦夫婦の 追求をかわす		
			給仕の女にこっそり 着替えを覗かれ 傷を気味悪がられる	あとはひたすら 聞多のフォロー		
			楠湯で顔見知りか 何人ができる			
			楠湯に全身傷だらけの男がくる			
	ある日	9 or 10時ごろ	破落戸と喧嘩			
楠湯で14・5人の 破落戸が喧嘩 とぼつちりで 頭から湯を被り ブチ切れる						
例の傷の男だ! と破落戸たちは あわてて逃げる						
縞柄も似ても似つかない ボロボロの着物が 一枚残っていた						
破落戸に 着物と胴巻を 盗まれてたのに気づく						
無一文に						
ブリブリしながら 仕方なくその着物を 半身に掛けて宿に戻る						
彦七に事の次第を話す						
村役人に届けようとする 彦七を必死にとめる 身分がバレたらヤバイ						
彦七はますます 聞多を疑うが 一度泊めた客なので できる限り 庇護すると決意						
	翌日		彦七が村役人に届出るも ただの盗難事件として 役人に葬られる			
			無一文の聞多はお静に相談 お静が持ってる僅かな金を路銀に お静だけ一旦下関に帰らせる事に お静は食い下がりが 以下の重大な使命を託され洪々承諾 1. 俊輔に聞多の順調な回復を伝える 2. 無一文になったので俊輔に送金を依頼する 3. 聞多出立以降の長州の様子を探る			
	翌日			別府港から下関行きの 便船に乗り出発		
	その後		俊輔からの返事を 指折り数える	無事下関に到着		
			定期便が何往復しても 一向に返事が来ない	俊輔を探しても見つからず 聞多に文を書く		
			お静から手紙が届く 文の内容は以下の通り			

【PR】長州藩モチーフのアクセサリ&グッズショップ「小間物屋歴創」

西暦	旧暦	時間	聞多	お静	俊輔	他
	お静が出立した 10日後くらい		・俊輔は行方不明 ・下関は開戦間近 ・金がなくても 別府にいた方が 楽しく良かった			
			藩主や同志が気がかり 一刻も早く 帰国したいけど 俊輔との約束なので耐える			
	その後		俊輔の安否 幕府軍の進攻を案じ ひとり寂しく過ごす			
			段々金に窮してくる 宿代の請求に怯える毎日			
	数日後		何日経っても 宿代の催促はなく 待遇も変わらずよい ありがたいけど謎			
	ある日		彦七が部屋に来る 遂に催促かと覚悟する 四方山の話など世間話 拍子抜けする聞多 彦七はあらたまって 聞多に身分を問う			
			正体バレの危機!?			
			町人だと答えるも 所作が明らかに 武家の人間だと彦七 絶対に秘密は守るから 話してほしいと迫られる			
			それを聞かれるなら 宿代の請求の方が まだマシだった			
			武家ではなく郷士だ とまだ言い訳をする			
			彦七は演技に あっさり騙される			
			が、今度は 傷の事を聞いて来る 仲間同士の喧嘩で 思ったよりダメージは 受けたけど			
			相手にも瀕死の重傷を 負わせてやった 双方一命はとりとめた と盛りまくった 法螺話を披露			
			そのまま雑談 宿代の話をすると 彦七は別に良い むしろ手許が不自由なら 少しくらいなら 立て替えますよと提案 ありがたく受ける			
		その後		彦七がちよくちよく 座敷にきて お金をくれるようになる		
	?		ニート生活開始			
	?				下関に戻る	
	?			お静と俊輔が再会 盗難の件など報告		
	?				聞多に飛脚を送る	
	数日後		俊輔から文と50両が届く 文の内容は以下の通り			
			・桂さんも四国に渡った ・高杉は近く帰国予定 ・幕軍は將軍の親征に ・長藩兵は意気揚々 ・幕軍の出発には数日ある ・割と有利だから ゆっくり療養してね♥ ・いよいよヤバくなったら 連絡するから その時はすぐ 帰ってきてね ・俗論党には聞多が一番 狙われているから どんなに身を落としても できるだけ潜んでいてね ・50両あるけど 足りなかったら いつでも送るからね			
			ニート生活終了			

【PR】長州藩モチーフのアクセサリ&グッズショップ「小間物屋歴創」

西暦	旧暦	時間	間多	お静	俊輔	他
			なるほどその通りだ ニート生活はやめて バイトでもして 決戦に備え 身体を鍛えよう 彦七の小遣いを断り 仕事の斡旋をたのむ			
			彦七いわく 土方人足の元締めで 本業は博徒の大親分 「灘亀」のところに行けば 仕事を紹介して もらえるかも 灘亀大親分プロフィール			
			彦七が 灘亀親分を訪問して頼む 客人でもいいけど 作法がめんどうい？ので 子分として 引き受けてもらう事に 彦七が報告に戻る おもしろがって了承			
			「ヤクザの子分」に転身 彦七に 「下関の町人」という 設定でおねがいします と言われる			
			灘亀親分と対面 武士言葉丸出しで挨拶 親分何かを察して 華麗にスルー 業務内容をレクチャー 彦七は 始終ハラハラして汗だく 親分に身分を聞かれ 設定ガン無視で 長州の郷土で 名字帯刀許可されてます と返答 彦七のライフがほぼ0に			
			親分は 間多の悪人面と アレな雰囲気 気に入って 賭場の用心棒には 願ってもない人材と喜ぶ 早速酒宴 舎弟が14・5人同席する中 親分・子分の盃を交わす 名字ありだと 土方には不似合いなので 「花助」と名乗る事に けど他の連中は 生国が下関なので 「長州」「長州」と呼んだ			
	翌日		当分毎日 親分の部屋へ通う事に あの傷はなんだ？ 気がさっぱりしてて 金は持ってるから 町人じゃなくて 武士だろうと噂になる			
			はじめての博打で大勝ち 間多を賭博に誘って 金を巻き上げようとする 輩がでてくる 輩に傷の事を聞かれ 武士2人と喧嘩で 斬り合った 全身斬られたが 兄弟に助けられ 一命をとりとめた と法螺をふく			
			一同驚き 顔だけじゃなくて 全身に傷があるんだ…… と不思議がられる			
			事実に近い事を しゃべりすぎたと焦る 丁半博打開始			
			意外に面白そう 見よう見まねでやってみる			

[PR]長州藩モチーフのアクセサリ&グッズショップ「小間物屋歴創」

西暦	旧暦	時間	間多	お静	俊輔	他
			戦感覚でサクサク勝利 3・40両稼ぎ 気を良くして その時点の有り金全部 80両つっこんで大勝ち 相手の金が尽きて終了 150~160両を稼いで帰る			
			親分が出先から戻り 事の次第を聞いてビビる 親分に呼び出され こっぴどく説教される 賭場を出禁に			
	その後		素人臭い間多に負けて くやしい輩は 報復のチャンス伺う			
			リベンジマッチ 親分が郷里の 豊前・長洲に帰ったので リベンジマッチ開催 部屋に祝事があるからと 誘い出され宴会 普段深酒する連中が みんな素面 そこそこで宴会を切り上げ 勝負を開始 甚だ迷惑だけど 立場上帰れない 隅っこの方で見てたけど 「長州でてこいや！」と 言われ断るも 5・6人に口説き落とされ 渋々参戦 2・3番とられたら ひきあげるつもりが 大きく3・4回取られた 素人なうえ 生来の負けず嫌いで 手持ちをどンドン潰かす 再び無一文に			
	ある日		宿にもどるも 鼻紙一枚 買えない状態に 途方にくれる			
	翌日	朝食後	彦七に問いつめられ 昨日の賭博の件がわかる 手をつけて 今後は絶対やらないと 誓う 彦七 あっさり引き下がる			
	翌日		流石に落ち込んで 引きこもる			
	翌日		親分が別府に戻り 間多を迎えに来る 賭博の件で きまりが悪く 仮病でやりすごす			
		夜	親分の部屋を訪ねる 「賭博家業をやってる 俺が子分の賭博を 咎めるのもアレだけど お前だけは賭博は禁止」 と散々しぼられる			
			内緒のアルバイト生活 賭博の一件は解決したが 懐の方は なんにも解決してない いっそホントに 土方をやって なんとかやり過ごしてれば 俊輔から金子が 届くんじゃないか？ 急場のぎに 土方の口を親分に頼む 流石に親分もビビって 彦七から預かってるお前に そんなことさせられない と断る 食い下がると 親分は渋々承諾			
	翌日		別府港付近の 工事現場で働き出す			

【PR】長州藩モチーフのアクセサリ&グッズショップ「小間物屋歴創」

西暦	旧暦	時間	聞多	お静	俊輔	他	
	数日間		彦七には内緒なので 平服で出かけて 親分の部屋で 作業着に着替えて 現場へ行く キツくて耐えられず みるみる衰弱 彦七が不審に思い 探られバレル				
	ある日	夕刻	着物を着替え 疲れきって足を引きずり 宿に戻る すぐに彦七が 部屋に飛び込んで来る 追求され 土方をやっていると 白状すると こっぴどくかられる 俊輔の金子がとどくまでの 急場のぎだから 見逃してくれと頼む 彦七が再び お金をくれるようになる				
	翌日	朝	ニート生活再開 彦七は 仲居を通じてだと バツが悪いだろうからと 娘のお初(12・3歳) に朝食を運ばせ 天保銭1枚をくれる 彦七の心遣いに感激				
	ある日	夜	荷物運びで一攫千金 親分の部屋からもどる				
		夜9 or 10時ごろ	楠温泉へ 4・5人の客がいた 相当の身分の人っぽい 隅っこで小さくなってると 1人の男が 顔をじろじろ見て来る いつのまにか そいつと2人きりに 声をかけられ かわそうとするも 身の上を 根掘り葉掘り聞かれる 仕方なく 下関出身で その日ぐらしの 土方をしないと答える そいつは質問しといて 聞いちゃいない様子 ひたすら体を ジロジロ見て来る 武士相手だと 下手なこと言うと 絶対バレルと確信 とっさに 「若気の至りで 友人の妻に手を出して 密会中に 現場を押さえられて メッタ斬りにされた」 と答えたら こっぴどく説教される 隙を見て 浴槽を出ようとする 「一緒にいこう」 とついでこられる 何故か気に入られた様子で そいつの泊まってる 旅館につれていかれる その武士は 豊後臼杵藩の武士で 妻子3人で湯治に 来ていたらしい 素性がわかり 始めて安心する				
				翌日は鐵(鉄)輪温泉 (地獄温泉)に 行く予定らしい お供をすることに 温泉に連れてって もらえると思って 約束の刻限に 旅館を訪ねると 荷物運び要員だった			

【PR】長州藩モチーフのアクセサリ&グッズショップ「小間物屋歴創」

西暦	旧暦	時間	間多	お静	俊輔	他	
	翌日		<p>よくよく考えてみれば 今の自分は日雇いの 土方なんだから あたりまえの展開 渋々荷物を運ぶ事に</p> <p>一里半の難道を ひたすら進む</p> <p>鐵輪温泉につくと 汗ダラダラで 受け答えもできない状態 長居をすると面倒だから さっさと帰ろうとすると 引き止められ 親子同様の胸で ごちそうしてもらう 話し込むと つい武士言葉がでて 自分でもヒヤヒヤする</p> <p>暇乞いをする 金一朱をくれた</p> <p>「心を改め真人間になって 親孝行しろ もう人妻には 手を出すなよ」 と言われる</p> <p>別府に戻って 彦七に報告 うれしくて一朱もみせた 彦七は額がデカ過ぎなので その武士は 間多の仲間なんだろうな と思った</p> <p>これで暫く 小遣いの心配はないので 安心して 俊輔からの連絡を待つ</p>				
	その後		<p>ニート生活再再開</p> <p>親分の部屋で やることもなく ブラブラ過ごす</p>				
	?				間多に使者を送る		
			<p>遂に正体バレ</p> <p>親分が子分4・5人をつれ ドカドカ入ってきた その背後に 立派な武士が1人と 彦七も従っている</p> <p>親分は間多を指差し 「あれが春山花輔だ」 と告げる</p> <p>武士は両手について 自分は奇兵隊の山田新五郎 井上間多殿とお見受け申す 伊藤俊輔どのよりの お迎えでござる と告げ 一通の書面を差し出す</p> <p>受け取って読むと 笑みを漏らして 「だいぶ切迫した 様子だから 今晚にも出発しよう」 と良い 山田は安堵</p> <p>この手紙は下関を出る時に 俊輔と示し合わせたもので 幕府と一戦交えるので 一刻も早く帰国するように という合図だった</p> <p>親分・子分・彦七は 仔細は分からないものの 間多の素性を察し 自然に頭を下げた</p> <p>彦七は やっぱりただ者ではない お人だったんだと 予感があたり 世話をしたかいいがあった と嬉しそうだった</p> <p>彦七は一旦 若彦に戻られては？ と提案</p> <p>お聞きの通り 急を要するので と断る</p> <p>威儀を正してあいさつ</p>				

【PR】長州藩モチーフのアクセサリ&グッズショップ「小間物屋歴創」

西暦	旧暦	時間	聞多	お静	俊輔	他
	ある日		ここでは自分はあくまで灘亀の子分 親分に帰国の許しを請う 親分は照れたあと暫く無言 知らなかったとはいえいままでの振る舞いを詫びる 一旦世話になった以上子分として別府を立たせてもらいたいと頼む 親分感動して号泣 彦七ももらい泣き 親分の部屋をでて若彦にもどろうとすると親分が前途を祝して一席もうけたいと提案 一同順に盃をまわして賑わった 若彦にもどり船の刻限まで聞多が滞在した二階の座敷で小妻お初ちゃんも同席 親分は上座に据えられモジモジしていた 若彦一家にご好意は一生忘れない志を遂げたら必ずもう一度会いに来ると約束 彦七に秘密は必ず守るからせめて本名をと請われこの時始めて「毛利藩士 井上聞多」と打ち明ける			
		船の刻限	別れの時 山田と共に一同に別れを告げる 彦七の手を握り感謝を伝える 親分も彦七も聞多もみんな泣いてた 別府港から下関行き船に乗り込む			
その後の彼ら						
1867年5月17日	慶應3年4月14日					高杉が死去
1873年9月	明治6年9月		彦七の妻・フジ死去			
1879年8月	明治12年8月		彦七死去			
1895年	明治28年		日清戦争終結		日清戦争終結	
1899年	明治32年		俊輔に別府に行くなら当時の事を調べて欲しいと頼む		政友会の公務で九州へ遊説 聞多に別府に行くなら当時の事を調べて欲しいと頼まれる 麻生太吉の別荘に宿泊 聞多が当時潜伏していた旅館が現存すると知る	
			俊輔に別府行きをすすめられる		東京に戻り聞多に別府行きをすすめる	
1902年8月	明治35年8月		親分死去			
1904年8月	明治37年8月		日露戦争開戦		日露戦争開戦	
1909年	明治42年		肺炎で生死を彷徨うも見事回復		病床の聞多に膝枕でアイスクリンを食わせる	
1909年10月26日	明治42年10月26日				ハルピンで暗殺	
1911年5月中旬	明治44年5月中旬		東京を出発			
1911年5月21日	明治44年5月21日		大阪から中国路を經由九州入り			
1911年5月22日	明治44年5月22日		三池炭坑を視察 三井倶楽部の晩餐会で昔語りをする			
1911年5月下旬	明治44年5月下旬		別府再訪			
			別府市相出で聞多を歓迎 存命だったお初と再会 お初が47年前のあの男が「井上馨」だと知り絶句			

[-長州藩データまとめに戻る-](#)

【PR】長州藩モチーフのアクセサリ&グッズショップ「小間物屋歴創」

西暦	旧暦	時間	聞多	お静	俊輔	他
			麻生太吉 別邸 「五六庵」にて 若彦の関係者を招き 一席設ける			

【PR】土蔵相模に集う長州藩士からツケ60両を取り立てろ！？長州藩乙女ゲーム「據夷テロリズム」体験版公開中

[-長州藩データまとめに戻る-](#)